

■ 第3セッション ■

大陸漢族研究からみる台湾漢人社会



報告

三尾裕子



コメント

瀬川昌久

中生勝美

聶莉莉



自由討論・質疑応答

座長

渡邊欣雄

コーディネーター

高明潔

.....
2006年7月15日

●座長（渡邊）— それでは第3セッションを始めたいと思います。みなさんにちょっと注意したいのですが、時間は厳格に守りたいと思います。1時間半もありませんが、6時45分にはぴったりと終わりますので、途中で発言しようが何しようが、ぱっと終わりますので、「ありゃりゃ」という状態です。一切いろいろな要約はいたしません。早速始めたいと思います。よろしくお願ひします。

◆第3セッション報告◆

台湾における漢人のアイデンティティの揺らぎ

台湾で「漢人」とは誰か？—台湾における人類学的研究の再考へ向けて

三尾 裕子

<東京外国語大学>

1. 背景

人類学が「他者理解の学」を標榜しながら、実は調査者（人類学者）の所属する社会の世界観を調査対象に投影して、他者を都合よく表象してきたのではないか、という指摘やそれへの反省は、オリエンタリズム批判、植民地主義批判などを通じて浸透しつつある。特に、『オリエンタリズム』においてサイドは、キリスト教圏のヨーロッパ（オクシデント）が、啓蒙主義的な立場から、理性的な自我を持つ近代西欧人の反対像として東洋（オリエン）を表象してきたことを糾弾した。そこには、当然、植民地支配者と被支配者の間の政治性、権力性の問題が潜んでおり、東洋を描く権利は一方的にオクシデントの方にあり、また東洋を代弁する権利もオクシデントの側にのみあったとされた。

サイドをはじめとするオリエンタリズム批判やポストモダニズムの議論は、近代人類学の「古典期」（1920—1970年代）（Rosaldo 1989）の伝統を根底から揺り動かした。特に、機能主義、構造主義などによる社会の分類や比較に依拠した一般化、人類の普遍性を志向した理論化が批判されるようになった。そこでは、人類世界を単一のモデルで説明できるとする西洋近代の諸思想が幻想に過ぎないと批判された。また、従来、文化は同質なものを外部から切り取ることが可能で、そのようにして切り取られた文化に属する成員は、同質の文化を共有していると考えられてきたが、逆にこうした同質性こそが恣意的に設定されたものだと考えられるようになった。

さて、本論で主要なターゲットとなる中華文化圏（儒教や漢字などの中華文明の影響を受けて文化を形成してきた諸社会が所属する地域）における人類学的な研究は、まさに、この人類学の「古典期」に始まり、またこの時期に最も精彩を放ったといってもいいだろう。中国大陸では、主に「社会学」という枠組みの中で人類学が導入されていった。当初、1920年代からアメリカのミッション系の大学を通してアメリカ人等の研究者による調査研究がなされたが、1922年に成立した燕京大学社会学系からは、後の中国大陸の社会学や人類学に指導的な役割を果たした費孝通や林耀華などが輩出された。また、1929年にアメリカ留学から呉文藻が帰国すると、ラドクリフ＝ブラウンが招かれるなど、中国大陸の人類学は、当時の構造機能主義的な人類学の影響を直接的に受けるようにな

った¹。

人類学の中で、中華文化圏の研究が理論展開の上で最も大きな貢献をなしたのは、フリードマンをはじめとする親族研究の分野においてである。フリードマンは、アフリカの諸社会をもとに構築された父系単系出自モデルが、高度に中央集権化された社会である中華文化圏においても同様に適用できるかどうかを検証した。その結果、フリードマンは、リニージ内部の不均等な分節、村落を越えた宗族の存在とその機能、リニージによる政治的経済的な支配と国家との関係などを分析し、従来の人類学の研究において注目されてこなかった新しい視点を提示した。このフリードマンのリニージ・モデルの構築に影響を与えたのは、呉文藻らに指導された林耀華が 1935 年に提出した修士論文『義序宗族研究』である。また、スキナーの影響力も小さくない。スキナーは経済地理学の中心地理論を応用し、解放前の中国大陸、四川盆地での調査に基づいて、マーケット・タウンを中心とした複数の村から構成される市場共同体モデルを構築した。

2. 戦後台湾における人類学の発展

その後、中国大陸では、日本の侵略と敗戦、中華人民共和国の成立を経て、人類学研究も一時多難な時代に突入した。中国大陸の漢人を対象とした人類学の中断に代わって、その分野の研究を引き継いで行ったのが、香港や台湾を舞台に活躍した人類学者である。ただし、以下、本論の目的との関連で、筆者が主に調査研究を行ってきた台湾に絞って言及することにした。

台湾における人類学的な研究は、日本による植民地統治の時代に始まった。とは言うもの、人類学の導入は、中国大陸の状況と比べて、恵まれているとはいえなかった。研究それ自体は、日本による台湾領有当初からさまざまな形で開始されたとはいえ、人類学の方法論や理論は確立されていなかった。高等教育機関で人類学が教授されるようになったのは、1928年に台北帝国大学が創立されてからであるが、人類学を教える「文政学部土俗人種学研究室」には、アメリカで人類学を学んだ移川子之蔵のほかには、助手に宮本延人（1940年から講師、1942年からは、台湾総督府社会課調査官）がいたに過ぎない。後に台湾の人類学的研究をリードすることになる馬淵東一は、1928年に台北帝国大学に入学し、土俗人種学研究室で勉強して 1931年に卒業し、その後同研究室の記念碑的成果となる『台湾高砂族系統所属の研究』の大部分を執筆した。しかし、これらの人々の主な研究領域は、台湾の先住民であった。いわゆる「漢人」²については、岡田謙の祭祀圏研究が戦後の人類学的な研究に影響を与えたものの、それ以外には、宮本が総督府の求めに応じて寺廟調査を行ったり、また植民地統治期末期には、主に「漢人」研究を対象とした半学術雑誌『民俗台湾』が発行されたりしたにすぎない。宮本にしても、『民俗台湾』に関わった人々にしても、彼らの研究は、どちらかといえば、民俗の採集と記録にとどまった。

日本の敗戦に伴って、日本人の学者はあい前後して台湾を去っていった。戦前に日本教育を受けた台湾の人々の中からは、戦後、人類学、民俗学の方面で活躍する人材が出たものの、戦後の学界のメインストリームは、圧倒的に欧米から輸入された人類学にとって代わった。そして、1960年代、70年代にフィールドワークを行った欧米の人類学者、また欧米へ留学した台湾の人類学者の多くは、フリードマンに代表されるリニージ研究やその展開としての家族、婚姻、姻族などの研究、スキナーのモデルを用いたマーケットの研究などを行った。また、1970年代には宗教研究なども盛んに行

¹ 中国大陸における人類学の研究史の詳細については、西澤 2006 を参照されたい。

² 本論では、従来台湾において漢人と呼ばれてきた人々を、中国大陸の漢人と区別するために、前者については「漢人」と表記する。

われるようになったが、こうした研究も欧米の研究者によってリードされていった。

欧米から人類学者が台湾や香港に集中するようになったのは、閉ざされた中国に対して両地域がその代替地として期待されたからである。特に台湾は、香港と異なり、面積も広く、また日本統治時代に蓄積された史資料も少なくなかった。台湾は、台湾の人類学者自身が述べたように「中国研究の実験室」としての価値を有していた（陳 1966）。1960年代から70年代の欧米研究者主導の台湾研究は、戦後世代の台湾の研究者を巻き込んで、フリードマンやスキナーが切り開いた研究をより精緻化し、また祖先祭祀や風水、宗教などへと広がっていったのである。

3. 「中国」研究批判

しかし、1990年代以降、台湾の人類学は大きな曲がり角を迎えているといつてよい。その1つの現れが、Stephen Murray と Keelung Hong による戦後の台湾における人類学的研究批判である。この2人は、1960年代、70年代を中心とした Arthur Wolf をはじめとする欧米人の台湾「漢人」研究が、台湾を「中国」である、あるいは台湾の「漢人」を「中国人」であると無条件に規定し、台湾そのものを研究の対象にしてこなかったと痛烈に批判した（Murray Stephen O. and Keelung Hong 1991, Hong Keelung and Murray Stephen O. 2005）。調査者自身が収集したデータは、台湾におけるデータであり、しばしば中国大陸でなされた調査結果と異なる点が見られるにもかかわらず、安易に「単一の中国」へと一般化されてきたというのである³。

また、Wolf の次の世代に当たる人類学者の Steven Harrell は自己反省も含めて、彼が「中国」民族誌学の黄金期と呼ぶ1950年代後半から70年代末までの台湾研究が、日本時代の統計資料や史料を用いて台湾を眼差していながら、対象社会を考察するときには、「漢人」社会を中国大陸の漢人と同じ所与のものとしてみてきたことを指摘している（Harrell 1999）。

日本統治時代という要素を人類学研究においてどう位置づけるかという問題も、大きな問題でありながら、従来の研究においてはほとんど無視されてきた。1980年代中葉に筆者が現地調査を始めた時も、台湾は日本統治時代という歴史を経ているにもかかわらず、中国大陸が社会主義化したことによって失ってしまった「伝統社会」が、台湾にはまだ息づいているとの安易な思い込みがあった。もちろん、日本統治が、それ以前の台湾の社会や文化のありようを、日本の支配に都合のよく改変しようとしたということは理解されていたが、しかし、そうした改変は、戦時期のごく短い間に急進的であったものの、日本統治期全体をならしてみるときには、それほど大きく台湾社会を変えたわけではないし、たとえ改変されていたとしても、その度合いは中国大陸の戦後に比べれば微々たるものに過ぎないだろうという憶測を持っていた。おそらく当時の人類学者の多くは、そうした考え方を共有していたものと思われる。こうした日本時代を不問に伏す態度は、戦後の台湾の政治状況との関係で醸成されてきた部分も大きいかもしれない。戦後の台湾の政府の公式見解は、日本植民地期を搾取と抑圧の時代として一刀両断にするのみで、一般の人々に日本時代を詳細に語りにくくさせていた。日本統治期に青少年期を過ごした台湾の人々自身、自分の青春期（それが決して

³ Hong と Murray によれば、こうした姿勢は、たとえば、現地の民俗語彙を記述する際に、方言ではなく、北京語で表記するところに見えるという。また、「単一の中国」を表象する姿勢は、当時の台湾の国民党政府の政治的イデオロギーすなわち、「中国」を代表するのは国民党の支配する「中国」である—に寄り添っていたという（Murray Stephen O. and Keelung Hong 1991, Hong Keelung and Murray Stephen O. 2005）。筆者も分担執筆をして1995年に日本で出版された『中国文化人類学解題』も、中国（China）の中に、香港や台湾を含めている。台湾の「漢人」が中国大陸の「漢人」と同じ「漢人」であることは、当時は疑いの余地がなかったといつてよいだろう。

100%バラ色なものでなかったとしても)を思い出して語ることすらはばかられた。まして、それを肯定的に語ることなど身の危険と背中合わせであった⁴。

日本時代の影響を極小化して考える見方や、フリードマンなどによって構築された理論の検証のために、社会主義化によって伝統文化が失われ更に外国人の調査が難しい「中国」の代替物として台湾を必要としたことなどは、研究する人類学者の都合によって作られたものである。即ち、人類学者は、理論の構築、検証の場としての「中国」を必要とし、その場を台湾に見出し、台湾の人々の文化と社会から「中国」のそれらを再構築し、表象してきたのである。

もちろん、このような眼差しの原因を、人類学者にのみ求めるのは酷であるという部分もある。というのも、台湾の社会文化を中国のそれそのものあるいはその一部と見る発想は、台湾が置かれてきた政治的な位置づけによって生まれてきたことでもあるからである。即ち、中国大陸と台湾との政治的な分裂状況にあつて、兩岸の政府はともに、それぞれ自分の政府こそが中国を代表するそれであると標榜してきた。特に、台湾の国民党政府は、中国の伝統文化を保護、維持しているという文化の正統性を主張してきた。ただし、そこで擁護されてきたのは、中国大陸の中原に淵源をもついわゆる大伝統、High Culture であり、台湾の一般の庶民の文化であったわけではない。このような姿勢は、国民党政府が台湾の一般庶民の民間信仰を迷信と位置づけ、また方言の使用を排除しようとした姿勢に見て取ることができる。そして、このような姿勢は、おそらく多くの台湾を研究する人類学者の台湾を見る視線と、共鳴するものがあつたと思われる。即ち、研究対象の人々の社会や文化の中に、「中国」全体に通じる構造を探し出し、そこからの逸脱の度合いによって地域差を語る姿勢があつた。

4. 台湾の「漢人」は、土着化したのか、あるいは、「漢人」になったのか？

1990年代以降の台湾に関する人類学的研究は、台湾において見られる中国大陸との異質性を、中国社会の中の地域差やバリエーションとして見るのではなく、台湾固有のものとして見直す方向に進みつつある。ここで留意したいのは、こうした傾向が、台湾を中国大陸とは異なる独自の国家として国際的な認知を受けたいとする台湾ナショナリズム運動と連動している点である。すなわち、ナショナリズムの正統性を確保するために台湾の独自性を実体として定位したい、というナショナリストたちの言説が生まれてきているのだが、この歩みは当然のことながら、最初に述べた文化の同質性と連続性に懐疑の目を向けるポストモダニズムとも歩調を合わせている。

1990年代以降の台湾では、さまざまな台湾「漢人」をめぐるエスニシティ論が登場している。その流れの詳細は、すでにさまざまな論考があるのでここでは繰り返さないが⁵、傾向としては、台湾の「漢人」が中国大陸の漢人と異なるエスニック・グループに属していると主張する人々が増えていく。そして、それらの主張の根拠には大まかに言って次の3点が挙げられると筆者は考えている(三尾 2006)。第1点目は、中国大陸と台湾の歴史的経験の相違である。即ち、台湾は、清国から日本に割譲されて以降、既に100年以上を経過し、戦後の国民党統治下においても、分断され、中

⁴ 政治の民主化が進むにつれて、台湾の人々も次第に日本時代の経験を語ることができ、また研究者も、その当時のことを現地の人々に聞くことができるようになってきた。それまでは、なかったかのように、あるいはせいぜい背景説明として控えめに注記されるに過ぎなかった日本時代の統治政策や、社会文化の変容、そして人々の生活についての認識や記憶が、次第に語られるようになるにつれ、日本時代の経験やその語りも、今日の台湾の人々の世界観、自他認識にどのような位置を占めているのかが明らかになってきている(三尾編 2004, 2006, 五十嵐・三尾編 2006)。

⁵ たとえば、若林 1994、三尾 2001、2006などを参照。

国大陸とは独自の政治的な実体を構成し、住民も日本植民地統治などを経て、中国大陸とは異なる文化社会を構築してきた、とする論である。更に、清代以前においても、中国の歴代王朝は、台湾をそもそも自国の領土であると考えてこなかった、と主張する議論もしばしば見られる。

第2点目は、台湾「漢人」の文化は、中国大陸からの入植後、400年ほどの間に、オーストロネシア系の先住民との接触によって変容し、もはや中国大陸の漢人の文化と同じではない、という主張である。特に、中国大陸から漢人が入植してきた際に接触の機会の多かった平地居住の先住民(平埔族)とは、婚姻を通じて女性を彼らの社会に取り込んだり、交易などでの交渉、土地の取引などによって次第に先住民の生活領域の中に漢人が入り込み、先住民を社会文化的に同化したりあるいは山の方へ彼らを追いやっていったりした。その過程は、圧倒的に複雑で精緻な中華文化による先住民文化の併呑であったとはいえ、今日の台湾「漢人」の文化の中には先住民の文化の影響も見逃せない、というのである⁶。そしてそれゆえにこそ、中国大陸の漢人と台湾「漢人」は同じ文化を共有しないので、同じ民族ではない、ということになる。

第3点目は、そもそも生物学的、遺伝的な側面においても台湾の「漢人」は大陸の漢人と異なる、という議論である。即ち、従来の歴史記述や国の統計資料などでは、台湾の総人口の98%はいわゆる「漢人」であるとされてきた。しかし、それは誤りで、実際には、少数の中国大陸の漢人が台湾にやってきて平埔族と混血したり、平埔族と文化接触を繰り返してきたのであり、台湾の「漢人」は、平埔族が漢化したと考えるべきであるという主張である⁷。

これらの主張が科学的に根拠のある客観的なものか否かは、本論ではさしあたり問題ではない。留意すべきなのは、台湾の「漢人」が中国大陸の漢人と異なる実体とみなされていること、台湾の「漢人」は実は「漢人のふりをしている平埔族」であるとの主張すら存在しているということ自体が示唆することの意味である。即ち、これまで人類学者が当然視してきた中国大陸と同じ民族としての「漢人」という前提は、もはや研究者側の暗黙の思い込みという段階にとどまるのではなく、当事者自身によって覆されようとしている、という事態になっているのである。

5. 人類学的研究における台湾の位置

以上のことから、今日の台湾で「漢人」について研究することは、場合によっては、調査対象を「漢人」とみなすこと自体を否定することになる。現在でも、公的な統計上の数字では、社会の主流派は1945年以前に既に台湾に入植した「漢人」及びその子孫である、ということになっている。しかし、その数字と実際の人々の意識の間にはズレが生じつつある。即ち、調査地で遭遇する人々を、調査する以前から居住地などから「漢人」と措定することや、彼等が中国大陸の漢人の文化と似通ったものを持っていることから「漢人」とみなすことは必ずしも自明ではなくなっている⁸。

もちろん、我々は、人類学的な調査を行う場合、その時々政治的なイデオロギーから離れることはできないと同時に、それに安易にしたがってイデオロギーを実体であるかのごとく再生産することは戒めなければならない。しかし、少なくとも、調査対象者や彼らの文化をア prioriに中国の中の一地方文化、あるいは中国の文化のバリエーションの一つとして考えるのではなく、現地の

⁶ 平埔族と大陸からの入植者との間の接触や婚姻による彼らの文化の漢化の歴史とエスニシティとの関係については、Brown 2004を参照。

⁷ たとえば、林媽利 <http://www.wufi.org.tw/taiwan/linmali.htm> を参照。

⁸ 実際、ある台湾から日本へ留学中の大学院生は、自身が書き進めている博士論文のインフォーマントたちを「漢人」と書くことをためらい、筆者に相談に訪れた。

視点そのものから捉えていく必要がある。即ち、彼ら自身が自らの文化をどのように認識しているのかを見据えていかなければならないだろう。

いずれにしても、中国文化なるものが、有機的な全体として客観的・自律的に存在するとする文化概念を脱却することが必要である。しかし、このことは、例えば親族論にみられるような社会構造のあり方の人類社会における共通性を追及するような理論構築を決して否定するものではない。フリードマンが、イギリスの人類学者がアフリカでの研究などによって構築した出自理論を、より高度に階層化した社会において検証しようと試み、多くの学者がフリードマンに続いて研究に乗り出したことは、人類学の親族研究に大きな貢献をもたらしたことは疑いない。しかし、こうした研究は「中国社会の親族モデル」を作りあげてを本来的には目指していなかったのではないだろうか？「より高度に階層化した社会」であれば、キン族の社会でも朝鮮王朝下の社会でも可能である。しかし、私たちは往々にして、キン族の社会と中国大陆とは異なる政治的単位そして異なる民族として考えるが、台湾については、そうは考えないことが多い。即ち、我々は、政治的な単位（特に、ここでは国際政治上通用しているイデオロギー的な単位）を文化的な境界と一致させて考えている。即ち、中国の親族組織、といったときの「中国」を客観的・自律的に存在するものとし、そこに台湾（あるいは香港）を無条件に含めるとすることを問題視しているに過ぎない。台湾の「漢人」も、ベトナムのキン族も、韓国人も、そして中国の〇〇地方の漢人も、程度の差はあれ中華文明の影響を受けている。それゆえ、たとえば、なんらか父系出自観念の影響も受けている。しかし、自文化と他文化の区分は、既存の政治的な単位の存在によって、相互を本質主義的に分断する（あるいは他者を本質主義的に自文化の中に絡め取る）ことになってはならない。

参考文献

- Brown Melissa 2004 *Is Taiwan Chinese? The Impact of Culture, Power, and Migration on Changing Identities*, University of California Press.
- 陳紹馨 1966 「中国社会文化研究的實驗室」『中央研究院民族学研究所集刊』22:1-14.
- Harrell Steven 1999 "Lessons from the Golden Age of "China" Ethnography", *Anthropological Studies in Taiwan: Retrospect and Prospect*, edited by Hsu Cheng-Kuang and Ying-Kuei Huang, Institute of Ethnology, Academia Sinica, pp.221-260.
- Hong Keelung and Murray Stephen O. 2005 *Looking through Taiwan: American Anthropologists' Collusion with Ethnic Domination*, University of Nebraska Press.
- 五十嵐真子／三尾裕子編 2006 『戦後台湾における<日本> 植民地経験の連続・変貌・利用』 風響社
- 三尾裕子 2001 「台湾ナショナリズムについての一考察—廟宇を通じた两岸交流を契機として」吉原和男／クネヒト・ペトロ編 『アジア移民のエスニシティと宗教』 213-238.
- 2006 「土着化か、あるいは漢化か？—「漢族系台湾人」のエスニシティについて」『中国 21』25 : 221-230.
- 三尾裕子編 2004 「【在台湾発現日本】特集」『台湾文献』55 (3) : 1-164
- 2006 「特集=台湾における日本認識」『アジア・アフリカ言語文化研究』71 : 39-203
- Murray Stephen O. and Keelung Hong 1991 "American Anthropologists Looking through Taiwan", *Dialectical Anthropology*; 16:273-299.
- 西澤治彦 2006 「序論：中国文化人類学の歩み」 瀬川昌久・西澤治彦編『中国文化人類学リーディングス』 風響社

- Rosaldo, Renato 1989 *Culture and Truth : The Remaking of Social Analysis*. Boston : Beacon Press
(1998『文化と真実 社会分析の再構築』椎名美智訳, 東京 : 日本エディタースクール出版部)
- 末成道男編 1995 『中国文化人類学文献解題』 東京大学出版会
- 若林正文 1994 「中国非主流地域のサブ・ナショナリズム 台湾」蓮実重彦/山内昌之編『いま、なぜ民族か』 東京大学出版会 40-64.



●**座長(渡邊)**— では、まとめをせずに直接コメントいたします。言いたいことは、私も台湾研究者ですが、この時代の範囲で考えると、ちょうど国民党支配当時の治世ですが、それはいまでも言われており、現在の台湾ではかなり批判されるのですが、台湾研究に対しては非常に意味があることです。それはつまり、今日いろいろな話があったけれども、「台湾は違う」と言って、中国研究を全部崩せるということです。

同じように中国で考えるとどうなるか。ところが今日、シンポの話は台湾に向けているということとは明白ですし、そういう点では攻撃力が非常に強い台湾研究が前時代の国民党時代における枠組のなかにあった。

ところがいま、政治は民進党が握っていますということは、台湾独立という前提がもともとあって、そこから台湾の歴史を復元しようとする、一連の日本時代というものに注目せざるをえない。台湾から中国を考えるというのはいまでは私はマイナーな感じがします。

それはちょっと議論に残すことにして、瀬川さん、よろしくお願いします。

●**瀬川**— 三尾先生の報告はたいへん刺激的で、実は原稿を早めにいただいたものですから読んでいたのですが、非常に啓発されるところが多くて、いろいろなことを考えました。その感想や質問を言い始めると、コメントの時間をはるかにオーバーしてしまうので、ここでは少しストックに、二つの視点からに限定させていただきます。

一つは、私がここにコメンテーターとして座っているのは、実は私が香港研究者だったからなので、香港との比較ということをちょっと述べたいと思います。もう一つは、人類学の対象設定という非常に一般的な問題です。

まず、香港中国人社会研究との比較の視点で申しあげますが、両者には非常に共通点が多いわけです。1960年代、1970年代の研究で言いますと、まさにいま三尾先生のお話にあったように、中国本土社会の代替物としての研究がおこなわれてきたのです。

その時代、植民者と言ったら何ですけれども、香港で言えばイギリス人、日本で言えば戦前の日本人研究者の研究史があって、そのあと地元の研究者による研究が勃興していったという推移も似ています。

ただ、相違点は相違点であります。まず、香港と台湾のサイズの違いというのは、けっこう大きな問題としてあると思いますが、これは言うまでもないことなので言わないとして、香港のほうは1997年に祖国復帰します。いまでも一国両制ですけれども、中国本土に返還されました。それに対して台湾のほうは、いまのお話にもあったように台独というものの模索が現在も続いていて、ここが対照的なところですよ。